



馬
一
二
七

508
22



門 1 5
508
卷 22



○經渭能介濁與清

妾身豈肯墮風塵

孤兒未必從他姓

一、女何曾待二人

白刃自傷心似缺

黃泉要見骨如銀

深山落日猿啼處

過客聞之每慘神

是元至正十二年紅巾賊起而亂於内江西の吉安

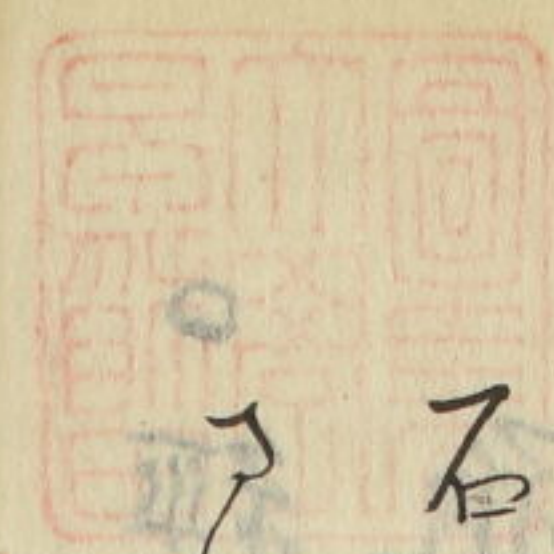
設城、曠家の婦賊に掠得られ、其志と踏ん

を恐れ一兒を又、壁上に絶命に辞して、強て自

を、夫と之を、敵に許さるを踏ん

婦人、自ら烈に、憐し

○我俗上南都奥福寺は華原段石よりなりし河濱シビシ
 石より子碓スリなりしと甚だふゆ一王應麟が玉海よりく
 通典曰河濱石可為段石近代之自華原云華原段石
 河濱の石にて作れるものなりと云ふなりと誤傳也を今
 とらうと云ふ河濱石も其音清亮なりと按ずるに我府城
 東高岳院の古石塔なりし酒井氏の墓は名知月妙庵折ハ音鉦の如諸
 人等もこれにみて藝蹟オシケガなりしと云ふ石塔を代し彼音も
 石とハちの段カクなりしと云ふなりと云ふ石塔なりと云ふ
 ことありしと云ふ玉をなすこと足斬れ一王ツキチ氏事も思ひ



出られ侍る

○て鳩席カシロ 琉球い本草附録に所謂江土一名江薩子これなる
 燈心草トウシンに似て三角なり席カシロとも云ふなり其書は
 ○孔子家語は果クハク属有六而桃モモ為下カキ奉祀不用カキと云ふなり
 ○漢唐の桃モモと果クハクの二にて殊ト目メなキと云ふなり
 糸祀イトノヒは月ツキいイと云ふなり桃モモ鬼オニを避サシふものゆゑカキ神カミは壽スめメ
 る書しして識者シキヤをシる
 ○近年柚ユズのメトトて是コト大キなる果クハクありサボサトト又ハササト
 子長端人ハ阿蘭陀アランタと云ふと云ふ本名如何ナニ曰是橋譜ハシノ

陶の黄りり或は妙修念仲の声或ハ
コトモノヲ信 兒帝の
 聲す或伴丈徳と觀るべく功と試へく
コトモノヲ信 一
 べくカクシ 車馬のいそぎげる雜心
 の里サト へ
 多しはれハ常にもまゝなる秋風
カクシ 廢荷に
 旅鷹言るをり連れ兼々ヒキ 嘸
 けし暫閑意り眠りたりトモ 籟
トモ 止で四壁寂に
 覺て残卷とそれを涼床月白く只
 隱これ
 一初の後とやのそとカミ 騷
レサカ 静ハ外境にありて一心
 毎ことしに誘つれイサナ 妙
サカシ 心
 けりり時去て夏の如くトモ 亦す
カクシ 凸凹
トモ 時何と

水り何とり厭りし緑水巧猫岩下月白雲送送
ハルカニヨリル

鷹頭山

三部密記五智の事委一法界の一体性轉トて四
 智と云れ

- 轉第八識 成大円鏡智 佛陀部
 - 轉第七識 成平等性智 金剛部
 - 轉第六識 成妙觀察智 蓮華部
 - 轉前五識 成成所作智 羯磨部
- 白淨無垢識
法界体性智

是任一大法界体性現五相成身妙智發生三十七尊乃至
 界會一切聖象万像形色等々トモ 一

○越路に秘し伝ふる人の便ははたしく又どうい
か我居北海君南海寄鴈傳書謝不能多山名
古れ詞多や書とらくせむもれく何れよ是て
ゆは名月の比おのつうたやそ

君惘北海我南海 秋月秋風不旧秋
旅鴈一声暮煙裡 江山千里談双眸

○扶竹のゆきまの竹やう王子敬が竹譜及び瑯琊代
醉多り見くく

緬茄眼茄の平氏景苑群芳譜滇南雜記をがう
ゆきまの竹やう種一ニこむせせー半夏の生

これらの如きとー秋のまゝは枯ゆしうれき
南方温地にあつては長せざるあや

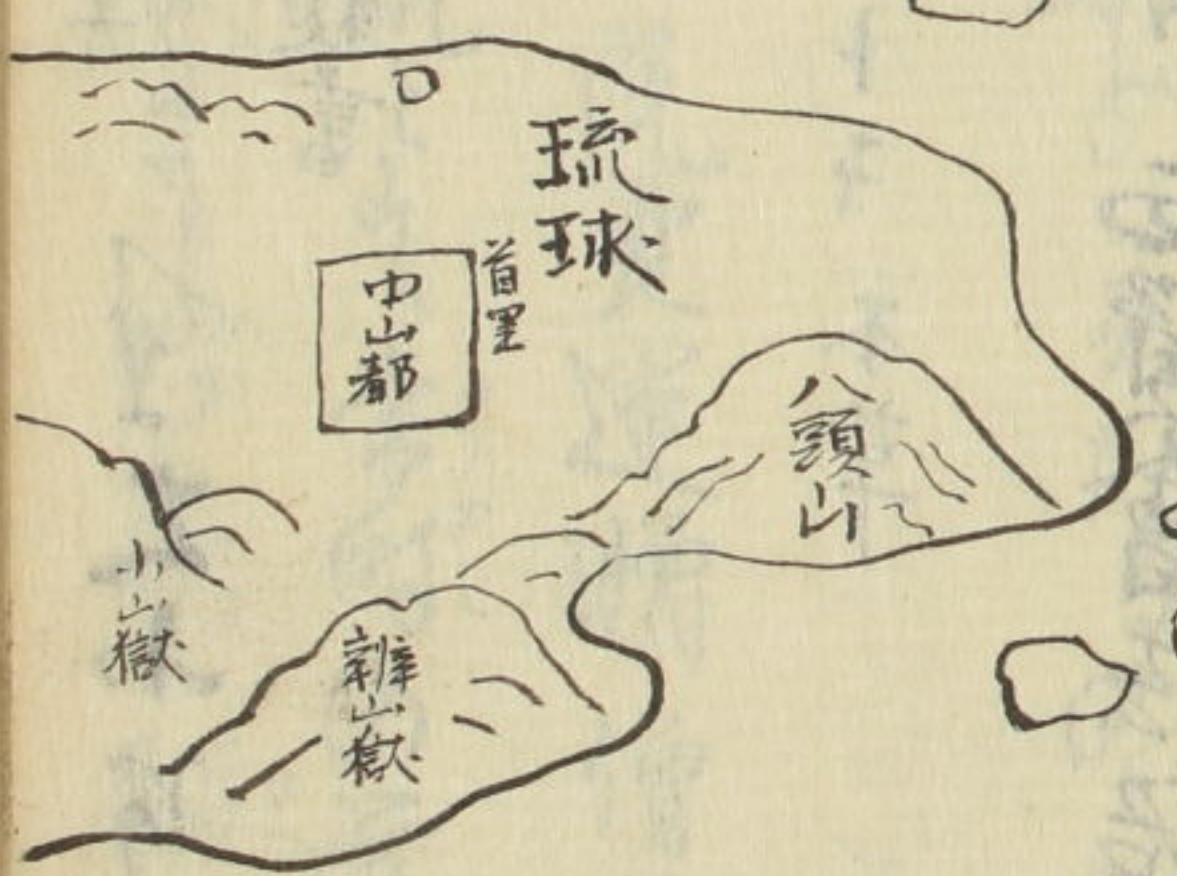
○繪の具の緞胭脂ハとやきうすの生葉とちがうそ
そ汁を御にいとらにまらわあや紫多

とそ土のどくろくと後よの煎汁と極末の石は
和し多し是の繪の具うたれ物な

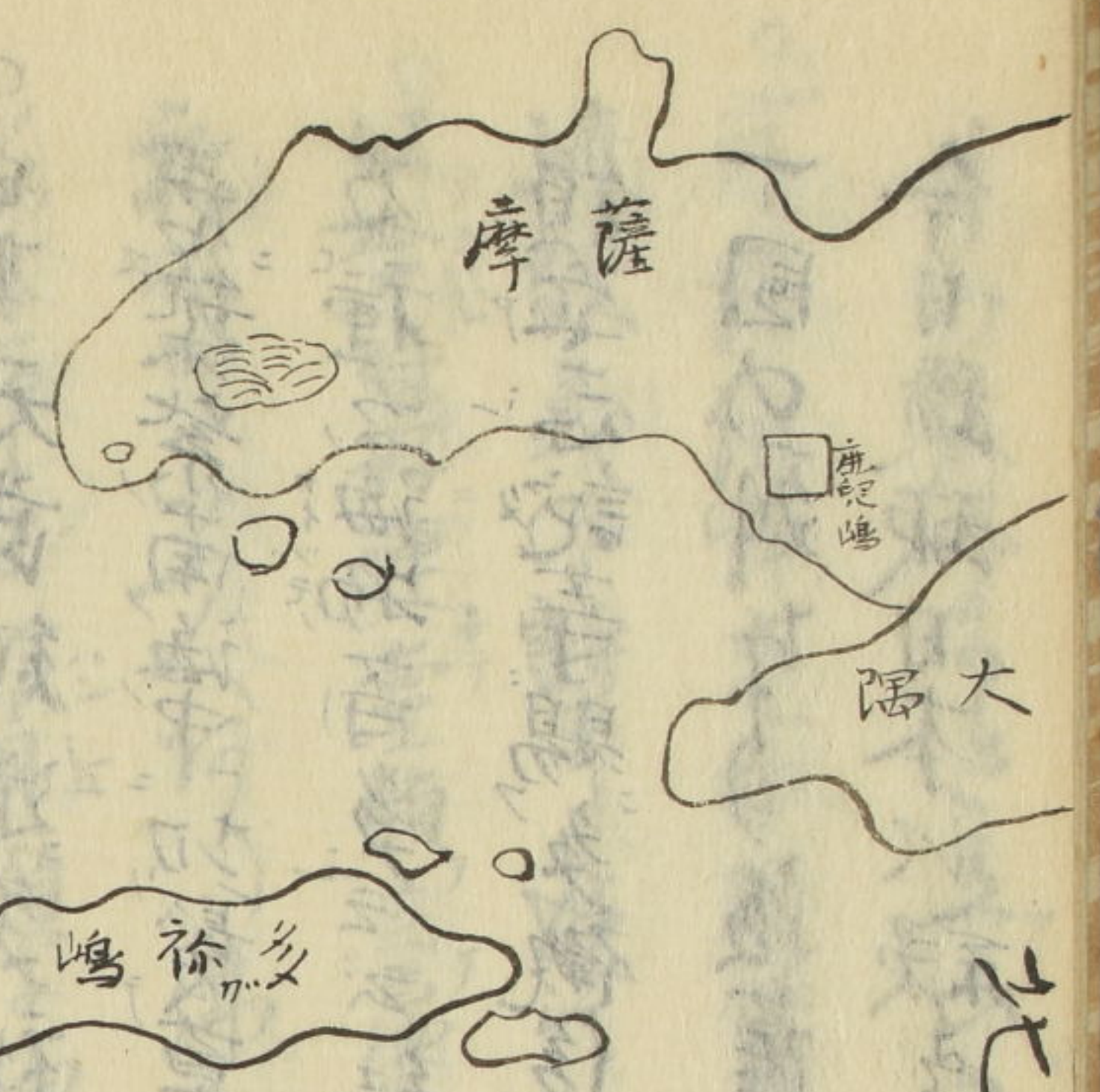
○十姉妹カッギ花譜に錦帯花もとく
花今種り花
やまよあきておト

○杉披の二字互よスギともてキとも訓せうスギとは直木
の轉語てマキハ真木ゆかぬがら謂倭歌にまきのア

九嶋
 玖振
 唐書所謂邪古是也推古天皇三十四年三月振玖
 歸化之文見日本書紀然古非也
 南
 迷狐
 那霸
 琉球
 中山都
 八頭山
 雜嶽
 小嶽



西
 摩薩
 大隅
 多祢
 國造本紀作多祢武備志明音
 他危云云
 多祢首有能滿益救回郡天長元年
 九月三日大政官符停多祢島司兼大
 隅國云云見類聚衣三代格第五



西
 玖振
 唐書所謂邪古是也推古天皇三十四年三月振玖
 歸化之文見日本書紀然古非也

○方目ハ俗ハハシト子鳥ナリ 本草 子鳥ナリト云ハクハ

告天子ニ六リナリ 三才易梅潜厝親書

繡眼兒ノシロ 常熟縣志

秧鶏クヒナ 本草

紅鶴トキ 本草

○淨土トハ清淨国土ト云々畧稱ナリ 西賢會法語 天如 諸法

不有之謂淨 諸法不無之謂土ト云々 觀心説ハカク 疑モヤケ

ぶし佛書多クテ 疑多ク

○清少納言、隨筆と枕双紙と云々 春曙抄と云々

解心也 按云 惠心、僧都、四教、五時、自受、月、等の事と

記せる書と枕双紙と云々 其序は晝置 三座 右ノ夜

置枕上字 レ 之云故云 号と云々 清少納言も亦同時の

官也 利根川の記に 效て 効せしやと云々 子人ナリ

源信、枕双紙、長保三年三月の作一卷ナリ 其書源

信の作也 此ノ觀心畧要ト云々 法世台家乃私

作ナリ 山門の学徒ト云々 一乗要决及ビ

注生要集等の筆也 此の云々 其の云々 解義

其云云

○住持、慈覺大師の嫡流、檀那院、覺運、贈僧正と撰嚴

院、源信僧都と兩流、其に正流と云々 孝時フナカミの学直、安海師

曰く、檀那ハ智深チカシも、学徒ト云々 唯んで、超コらん、楞嚴ハ

字情^{ヒト}も智^チ淡^{タン}搗^{タケ}て法^{ホウ}信^{シン}其^キ
予^{コノ}子^シ寂^{シヤク}照^{シヤウ}とて天^{テン}口^{コウ}十^{ジュウ}七^{シチ}祖^ソ四^シ明^{メイ}の法^{ホウ}智^チ尊^{ソン}有^ユ礼^{レイ}台^{タイ}宗^{ソウ}の問^{モン}
目^メ二十^{ニジュウ}七^{シチ}條^{ジョウ}と書^{キテ}吾^{コノ}釋^{シヤク}と請^{コト}けよ安^{アン}海^{カイ}其^キ目^メと見^ミて是^{コレ}等^{トウ}の
層^{フキ}龜^キ山^{サン}遠^{エン}向^{コウ}を我^{ワレ}んや^ヤ即^ス自^ジ上^{ジョウ}中^{チュウ}下^カ三^{サン}吾^{コノ}を仰^{オウ}て曰^ク
宋^{ソウ}國^{コク}の吾^{コノ}教^{コウ}ハ三^{サン}種^{シュウ}よ^{イテ}出^デて^ス既^ステ寂^{シヤク}と^テ後^{ノチ}は法^{ホウ}智^チ大^{ダイ}師^シの
吾^{コノ}釋^{シヤク}来^キる多^タく^ハ海^{カイ}師^シ中^{チュウ}下^カの義^ギ行^{コウ}し^とん法^{ホウ}智^チハ螺^{ライ}淺^{ケン}
三^{サン}世^セ私^シ派^{パイ}の正^{テイ}傳^{デン}台^{タイ}寂^{シヤク}中^{チュウ}奥^{オウ}の各^{カク}師^シに^{シテ}是^{コノ}吾^{コノ}雲^{ウン}大^{ダイ}師^シ傳^{デン}
德^{トク}を仰^{オウ}く^セる^ハ深^{シン}信^{シン}業^{ゴウ}と法^{ホウ}智^チを請^{コト}て^ス交^{コウ}銀^{ギン}一^{イツ}汝^ニ師^シ解^ケ
教^{コウ}と^テ自^ジ知^チる^ハ亦^タ出^デ類^{レイ}の英^{エイ}指^シび^と山^{サン}門^{モン}人^{ニン}な^らば^モ此^{コノ}
二^ニ十^{ニジュウ}七^{シチ}回^{カイ}吾^{コノ}佛^{ブツ}祖^ソ通^{ツウ}紀^キよ^クく^とる^ハ

。室^{シツ}永^{エイ}七^{シチ}年^{ネン}庚^{ケイ}寅^{イン}天^{テン}下^カ巡^{ジュン}察^{サツ}使^シを^シ 余^{コノ}一^{イツ}の^ハ今^{イマ}茲^{ココ}卒^ス
卯^{ボウ}の秋^{アキ}凡^{ソド}諸^{ショ}侯^{コウ}群^{グン}牧^{ボク}に^{シテ}願^{ガン}多^タ 台^{タイ}諭^{イン}一^{イツ}紙^シ如^{コト}此^ノ
諸^{ショ}道^{ダウ}巡^{ジュン}換^{カン}使^シ言^{ゴン}上^{ジョウ}之^ノ赴^キに^{シテ}就^クて^ス国^{コク}郡^{クン}治^チ吾^{コノ}建^{ケン}
御^ミ聽^{テイ}也^ヤ遠^{エン}る^ハ所^{ショ}料^{リョウ}私^シ願^{ガン}乃^ハ同^{ドウ}其^キ善^{ゼン}政^{テイ}特^{トク}可^カ
著^{アツ}れ^ル國^{コク}の^ハ所^{ショ}料^{リョウ}と^{シテ}大^{ダイ}抵^{テイ}風^{フウ}俗^{ソク}善^{ゼン}政^{テイ}事^ジ願^{ガン}す^ハ
曰^ク一^{イツ}川^{ケン}以^テ固^コ守^シよ^ク及^ツぶ^ハ也^ヤ
國^{コク}君^{クニ}御^ミ憂^ウ慮^{リョ}を^シ海^{カイ}の^ハ所^{ショ}料^{リョウ}也^ヤ 報^{ホウ}也^ヤ
御^ミ代^{ダイ}始^シの^ハ日^{ニチ}儀^ギ也^ヤ 日^{ニチ}ハ

思古仰ル旨ヲ方ク々ニおらるるていふも仰ル孔ノ同ノ年ノ所ニ也
自今以後仰料乃以役人國郡の諸領主凡ソ大ニ此
政ニ更ニ自レ自レ懈ルる所ニ行クくニ民者其生生トを通了スむ
べし其地日ニ知ルて舊弊ヲ於テ改メる事ハハはハらレル
におわりてハ嚴ク其法法ヲを行く事ハハ由ル也
仰ル出ル者也

正徳元年八月

右八月十五日被仰出云云

○風俗

上既化且風
下所習且俗

教化

以道業誨人謂之教
於上風動於下謂之化

古ノ一ノ小ノ學校ヲ設テ行藝を修め大學校を建て

道徳を明いして上故ニ風化上ニ平くして習俗

下ニ表はりし後世小學の教廢れて人才劉喪し

大學此教を以て義理明らしむ事を急て朱子大

學乃一書を修て上下を行く真西山浙義を

述して時君と論じ皆是道と正一風俗と改め

道以て上は好まる其文は極て其實を教ひ其

理と需く一孔を身一未くしと知る事を徒に論説

口耳乃習ふ事を急て聖言を傳へて止

又至る二再痛むはらんや

○心逆し題せし書あり何人の因せし事成る事
そ中しよどいもや思ふありありと二三条抄し

侍れ文をきりぬ割し改め

古くの道今に直すし者い道を知らば人なり
れそを國の所の穀とて今日ゆき包も作らねと
そ何田に育が如きい書よ書なるはく一書百年
と歴てても母もわれ種子何のそれ理りんそま
細り置しはひととそ年の春前ハ必し實一
これだけ去りの種子作ませし古くと石とは

あ方年の昔より年々こゝに傳く種一はのよま
と代の所の種と全そありありこれぞ道とそ
もあましくそ氏の季孔子傳りぬひ一遺物とそ
謹唐の註者傳くそ書と強く定れ時母びめし
あましくそや傳くて我あにゆき一書書お如き
とめて能傳て身にゆいゆき古の道今れ道そ
二道ありしに経書ハ道と載す所忘るしそ書
ゆきそ道と傳れはくの明法あり能傳りて他
そけく氣化の所よりそにゆきまそ古と書
の物よりそりも同じ古くことゆきすれ傳

ありけいとくもむを波の害とあれ地形よその
水路より堤塘と流が故は洪水にハ必定破とて
くの所ヤも命とわや一ツは費とあり所也
又氏の教とそくして田と完うた新河ハ新田よのモカ
と入して取回却てとらそふあものなり時
の利と命うて来の代の愁と強す者ハ必の罪人を
とどもましくくを運ととわゆるくの收とあふ
はあれの者ハ多く奸人に欺として要害の地とむ
かしく又も其目の地とあらめて人の福とあ
るそ世法もあうれとト三利は速に放

。小人は月ひらるる政事の根中と破れ事
なり

是れ巧をれ物とて人は衛ひ他の目と
敬馬一うてこが耳と怪ぬ者有り或は人見そと
とらそやも我もあつて人とするより常き月乃
是れと作らるる世の貴くあつてあつてあつて
一昔の意ハ賢實とてそくは巧なり
自て用ひるる貴なり

○延喜帝先賢の圖像と猫一の絵
け外なるけりけりけりけりけりけりけり
○延喜帝先賢の圖像と猫一の絵

縹やちりやちりせぬをわづらひ縹のいりてなきことたて
まつりきぬしとて又てゆりて見くまぬをわづらひ
新アキラし清キヨらぬんを物とて申あうりてそを
きの新アキラあられとてわづらひぬしとてわづらひ
ゆりてわづらひ古登及び貴人各所々の墨跡が
の袷具又ハ茶器の袋やれぬとせらぬもぢぢの
指ササばきとてふてきとせぬをわづらひぬしとてわづらひ
とせぬをわづらひとせぬをわづらひぬしとてわづらひ
しゆりてとて辨ワカへばらぬ

○ 奥列ウチノタビに象ゾウ深カマと云ふ所を我毎も象ゾウのやうに又
ハ地象チゾウのうらに修シユる故コトの名ナをわづらひぬしとてわづらひ

象ゾウ深カマハ出羽デヱの月ツキは撮トりて同ドウ法ホウ師シの教ケウに
世セがしとてわづらひぬしとてわづらひぬしとてわづらひ

きさやとて教ケウ書ショにわづらひぬしとてわづらひぬしとてわづらひ
うたはとてお列オケツのうらにきさやとてわづらひぬしとてわづらひ

きさ見ミとてハハと清キヨらぬゆりぬしとてわづらひぬしとてわづらひ
ゆりぬしとて同ドウ類レイをわづらひぬしとてわづらひぬしとてわづらひ

象ゾウの字ジハかり用ヨウひてわづらひぬしとてわづらひぬしとてわづらひ
象ゾウの字ジハかり用ヨウひてわづらひぬしとてわづらひぬしとてわづらひ

○ 象ゾウの梵バン語ゴハ伽耶カヤ録ロク 其キ雄ユウハ牙キバの長ナガさカ七ナナ人ニヒト雌メハ牙キバ

終ハツカに天アマ修シユくさす其コノ文コト既シ時トキハ水中スイチウニ在アりて胸ムネと云イハふ

相アイ點トクずとも 本草 集解 大聖ダイセイ歡喜カンギ夫ツレの秘ヒ像ゾウも是コノ

よそ男オトコの所トコロをたゞきも象ゾウの足アシ指サシく尻シラ申マシりとも

虎コの足のともく登ノボハ流ナガらう 

○獅子シシの胡語コゴを僧ソウ伽カ彼カと云イハ頭カビラさうりて大オホに尾ビ長ナガき

り身ミと毛モウを云イハふ我國ウチクニ獅子シシの繪エハ似ニテ形カタチクナ

○澄水スミズキ帛ヒトハ見ミて涼スズクく能ス暑アツク氣キと流ナガく龍リウ絹キヌ衣イハ

輕カサくことと搏ヒト之コトハ一ヒト握ニギりも盛シメさるり杜陽トヨウ編ヘンよ記キ

せうの如ニ於ケル重宝ジュウホウの物モノをみんもせり帝ミカドヲみん

欲ホシく如ニ於ケル者モノと作ツクる夏ナツ褐カフ冬フユ裘ヒツの均ヒトク易ヤスき

もど体ミと敵テキに完マツルく如ニ於ケル者モノ有アルり又マタ身ミと錦繡キンシュウに

埋ウマ光彩クワクワイと輕素ケイソに動搖ドウゴウす如ニ於ケル人ヒトも侍シ死シ貪オン富フ皆ナニ天テン

りく人ヒトカの如ニ於ケル者モノもす如ニ於ケル者モノ能ス者モノ也ナリ

○杜詩トシに明年ミナシタ此コノ會カヒ知シ誰ナニ健ケン醉サイ把ヒ菜サイ蔓マン仔細シジボ者モノと重オモ

陽ヨウ後ゴ菊キクの會カヒハ常ツネに如ニ於ケル身ミと觀ミせりも如ニ於ケル如ニ於ケル者モノ也ナリ

鳴ナリ呼コト萱花ウナカの勝カチと換カて延壽エンジュウの客キヤクや 紅葉の囊

と佩ウで辟邪ヒヤクジャの翁オウと呼コトりも豈ナラ風葉フウエフの身ミよりまぐり

る如ニ於ケル者モノも如ニ於ケル者モノの植ウ殘ザンせり菊キクれり

綻ホコびて見ミる秋アキの如ニ於ケル者モノも如ニ於ケル者モノの如ニ於ケル者モノ也ナリ

寒サムの紅ベニる如ニ於ケル者モノも如ニ於ケル者モノ也ナリ

赤寶萱花荒徑色 爲誰延壽碎邪名
東菑夢回殘風去 獨送飯雲聞鷹声

辛卯九月

○菊以象采に後とく霜り笑ふと隱逸の意操り
あまの道の汚泥り漬るるすく水とあはと君子
の潔行に比す獨牡丹と留まのすじにとれハ鄙
しむは似るるも茶蘆斎の牡丹日富貴所謂
仕者爲通也とく此とひて足進とて宛躬菊通牡丹其後
うく道りまどはく道りまどが懐にすれハ君子
蓮れ時中する所りまどと三花にまそりまもや

自疑自失自驚心 却嘆斯人巧用心

獨有愛蓮堂上月 分明照破此人心

朱先生の詩に荷花十丈是尋常明月露冷無人見
やゆとせし意とく見を因子命辞の味と知るも
○程子曰解義理若一向羸書冊何由得居之安資之
深遺朱子の口占に川原紅緑一時新暮雨朝晴
更可人書冊埋頭何日了不如拋却去尋春と云れ
一般の意より後の學者ハ教者の葛藤に縛せし
れゆもやうそ空腹高心して不立文字の段

草小笠とれらハ小忌衣はてそりねりひりねらの花はるを
けく今年も言はくハ下段なるをききうりて思ふれ家
ろく神は今一ハりよとあられてちるはるのまはるの海
満元釣長あもり上花をわここのかあふくよあるた
あまひおらね

こまねあまの枝とわのまのつらまにあらねれぬれとも
あまね衣今ハとれぬくともはくく船家山乃
名らんかれさくらのまのまのやみあめをききまをりる
難飛浪こりもとねぬれ飛雲のほりてこまね見ひ
ろまん千世のねまの角のうて今ハひはる伊勢の海

袖ぬせとそりらのまのりん藤垣まのこいさかまのり
もろれりも水に河川ハ夜衣なごツれガ名年一菊
こしハ折れてんぞまのりもこいさか

馬の一歳はゆと馬と二歳はゆと駒とそく我俗二歳
四歳はゆと駒ハ罪くそ人ゆりてちあひな五人以上
れ馬をまて駒ハ一字書ハれそ二歳はゆとあざりて
。今度朝舞乃聘使まのちも國東番長近衛の官人も
命一ゆり其數八人ありれハ定れ与教も一甲曰撰関

乃隨身番長二人近衛三人八員八員八員御准御侍
番長八騎馬近衛八歩許 隨身宣下五右近衛番長各一人近衛各一人
乃才我礼書より

我公室御隨身六員六員御言参議御言以隨身八員六人

此事弥安礼節等より

以畝山延曆寺近江国志賀郡内所々都人百五十石 目録在別書

事永代令寄附果全可破寺等之條如件

慶長十五年七月十七日安康御判

山門三院御判御代

山門三院東塔止觀院西塔宝幢院横川楞嚴院
也延曆寺一山三塔也

山門凡一百二十五坊其封五十石内東塔正覺院一百石

西塔正觀院五十石横川惠心院五十石其他每

院二十五石を元行

延時寺第一祖傳教大師 極楽浄土院 分二祖義興尊者才二世

慈覺大師前唐院 慈覺心外法流 教派又分 所謂法滿院流

利生院流三時院流等又 坂本西教寺一區中七淨

土門と字の 燒燬二尊院 西山善定寺三銘寺及比洛遣迎

院廬山寺等大台真言律海土の 四字之 兼字と 常生之

明寺も 亦古 四字兼 字の 利今 唯淨土門なり

是點僧道衍が請上善人詠意 思姓 尉玄 將三 藏の 分子 甚

なすてをえんハ大麻巻教束固く御も醫陰の隣か
一にけは述出て於ハ僧法師の徳れ地なりゆるよの
つねのりうふぬよこ

○長洲赤間岡の北一里ハ入るよ家の傍に子所ありとこり
天然の墓子なりう口國の海也ハ饅頭石とて奇也侍る
淡路の玉石とてやうにて多く那智の黒石も亦墓子とて
山城ハ鷹岩寺あり鏡石伊勢の唐舎もく新く入る石あり
築前の名場ハ帆柱石新前敷野の井石とてあり
也我尾南多智郡ハ石と新く侍るあり近江國光
曾村の也とて新く入る石とてあり

の鷹つゆゆるがゆ又まもも黒石とて大和本
草ハ是よりむとてこれ石炭とて智多郡ハ石
うま

○海龜 和名イサナドリ

昔ハモリとて突キをえりて射る死して油は青
を射漢とていさばどとハ青便なり

近江の湖ハイサナドリとて魚ハよあり
磯茶取けり油龜といトカ

○河豚 我國大陸ニ種ありカマイとて大キにて遍身刺り
味厚く毒多し臭くハ小にて刺なく味軽く毒
少し又一種ハむぐとてアリ形長く一層細

結實のやく歯尖にして
 上下口各一枚づあり腹白
 して刺りて又青黒く黄を
 帯り味不好にして酸しこれ
 毒女スナ一とくも下品なり



結實河豚之魚

〇凡毒魚は河豚クダれと俗にあり侍る海魚よ其毒莫多し
 本草に海薑ハ其毒鴆トクより甚しとす我俗西國より
 ムカデクジラムカデハ利ハ莫甚大にして背セナガハ五鬚ヒゲより出腹ハラ十二足
 河豚をくくハ忽トク死シとらん
 足有アシ八莫モク彈ダン達ダツのシもハ牽波志ケンハシ一名を園胡エンコも其
 他サマ歸カエ莫モク足アシハ利リ草クサ臍シ莫モク一名琵琶ヒバ莫モクも亦モトくハんハ後ノの緒
ス即トク年ネンなりりカるキ類ル猶ナ多クなり
 〇口葉集クハノ堅カタ莫モクハ名ナト海ウミ俗ソコ鯉ニハ俗ソコこれヲ東トウ醫イ室シツ鑑カンハ載ナ
 和ワ莫モクのノハ和ワ本草ホクよりク多クなり又マ東トウ醫イ室シツ鑑カンのノ各ナ莫モク
 我ワ國クニのノ籍セキハク籍セキのノ字ジとクのノ書シヤハクとク也

○元至順辛未福建廉訪使密闌汝求仙詩に

刀筆相從四十年 非非是是乃予々

一家富貴千家怨 半世功名百世愆

牙笏紫袍今已矣 芒鞋竹杖恁悠然

有^テ人問^ハ我^ガ蓬萊事^ヲ 雲在青山水在天

○元將^ニ都下有^リ罵王郎曲極^ム其^ノ淫^ヲ決^シ之^ノ狀^ヲ蓋^シ是^レ宋^ノ間^ノ濮

上^ニ之^ノ風^ヲ居^リ變^シ風^ノ之^ノ極^ニ嗚^キ呼^フ元^ノ人^ノ之^ノ情^ヲ以^テ此^ヲ可^ク知^ス

○或^レ人^ノ問^ハ新^ノ氏^ノ各^ノ宗^ノ其^ノ祖^ノ多^ク他^ノ非^ズ一^ニ自家^トと張^リ大^ニにす^ル和^ノ宗^ノ

各^ノに^テ背^リハ何^カも^ト曰^フ瑜^伽論^ニ五^ノ日^ヲ或^レ為^リ成^立立^セ自^カ宗^ノ或^レハ破^壊壞^ス

他^ノ宗^ノ或^レ為^リ制^ス伏^ス於^テ他^ノ或^レ為^リ摧^ス屈^ス於^テ他^ノ建^ス立^セ宗^ノ義^ヲ又^レ曰^フ用^キ自^カ

伏^ス他^ノ一^ニ此^ノ等^ノと^シあ^らく^もい^はれ^ば我^ノ執^ス一^ニ自^カ勝^ル他^ノ方^ノの^ノ念^ヲに^シ沉^ム

ろ^く一^ニ日^ヲ蓮^ノが^ノ如^ク是^レ也^ト瑜^伽の^ノ意^ハ彼^ノが^ノ如^クに^シ非^ズ文^ノ成^ル

ゆ^へて^テ意^トと^シ害^スす^ルゆ^へあ^らぬ

○弘^ノ教^ノ和^ノ尚^ハ金^ノ剛^ノ智^ニ三^ノ教^ノを^レ稱^ス也^ト辯^正三^ノ教^ノハ不^レ空^ノの^ノ傳^授

大^ノ師^ハ我^ノ國^ノ石^ノ山^ノ内^ニ供^テ淳^ノ祐^ノの^ノ異^ノ稱^也

○安^ノ然^ノの^ノ對^テ授^キ記^ヲ覺^ス超^スル^ル東^ノ曼^ノ荼^ノ羅^ノ事^ヲ等^シ金^ノ胎^ノ兩^ノ界^ノの^ノ事^ヲ

○新^ノ氏^ノ蓮^ノ花^トと^シて^テ種^々に^シた^ルも^ト或^レ偽^シ世^ノ親^ノの^ノ横^ノ論^等に^テ依^リて^テ

圖^ル化^スて^テ示^スる^ル是^レ阿^ノ弥^ノ陀^ノ蓮^ノ華^トと^シ相^ニ表^ス表^スす^ル事^ヲ

と^シ顯^スる^ル如^ク也^ト

蓮華

妙香 可愛 柔軟 清淨

譬法界真如

常樂我淨 四諦

大山鏡智 平等性智 妙觀察智 成所作智

不壞 歡喜 自在 不染 四位

无量壽如來

甘露王如來

觀自在王如來

清淨光如來

清淨金剛

具三昧耶形八葉開敷赤蓮華

其全體阿彌陀如來 其大用妙法蓮華經

○相列鎌倉佐介谷克明寺開基良忠記主禪師父御堂關白
過去帳年月名鑑よつて按て良忠道長、後一條院、万壽四年
に薨り、良忠、後宇多院弘安十年又寂り、其間二百數十
年あり、いひ曰、禪師の傳とらんば道長八世の孫なり、
之り又系圖と按て良忠

道長

御堂關白

賴通

宇治關白

師實

京極攝政

經實

贈大政奪

經定

權中納言

賴定

參議正三位

賴房

左中將從三位

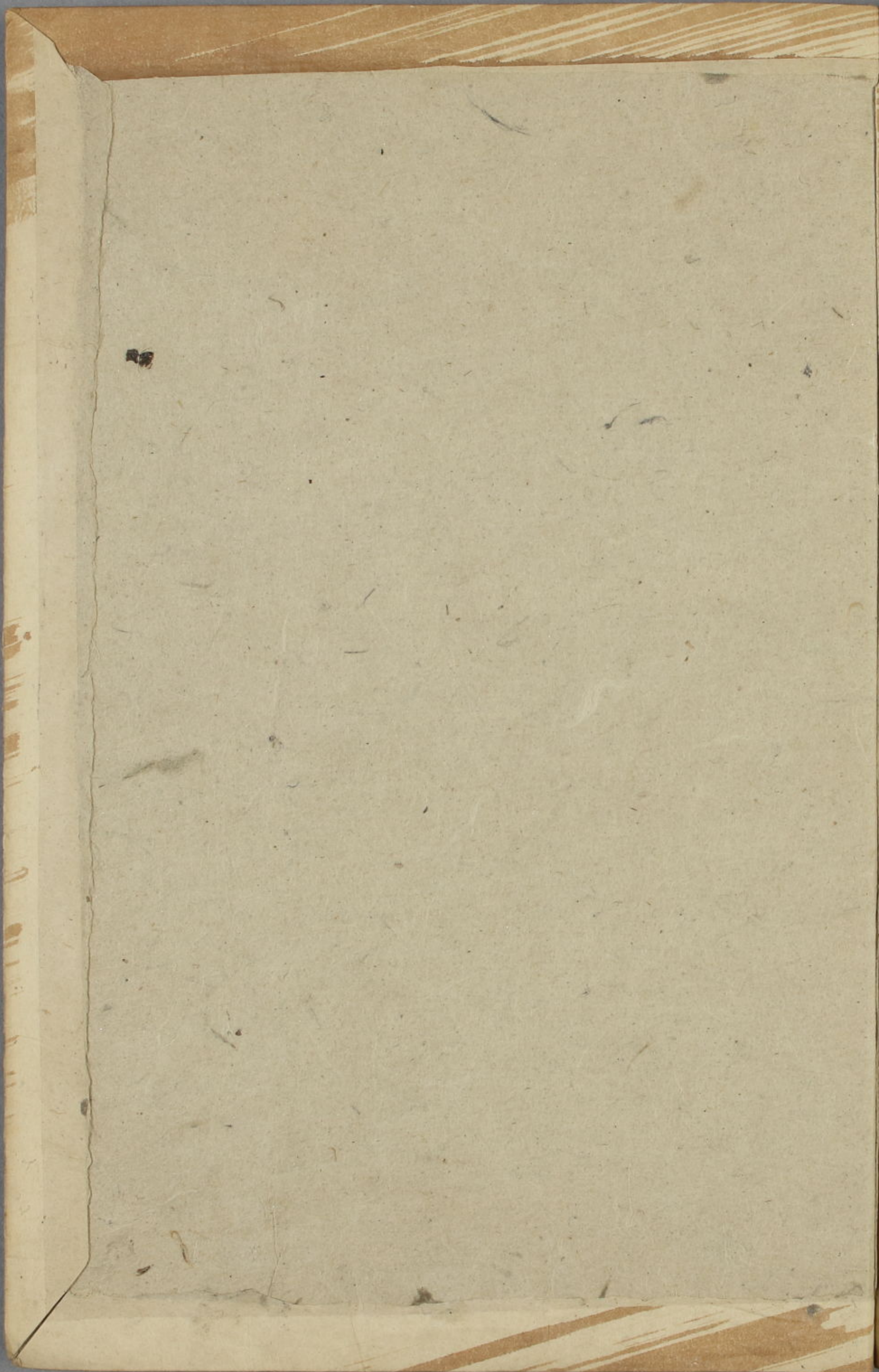
記主禪師

鎌倉光明寺開山

母伴氏

禪師 正治元年七月二十七日石州三隅庄に生る十二歳
 乃時雲別カクニ禪寺に入て月珠房信暹上人の弟子と
 なりて天台を學ぶ中比尊觀上人の弟子源朝庵梨子
 依て真言を學ぶ又兼西禪師此師兼朝庵梨子
 諷して禪を修む又後為禪師と受戒して清と名ふ
 晩は初紫善導寺の開祖西堂光上人の室に入て淨土宗
 と修むこれ初蓮社の方之祖多弘安十年七月有
 鐘舎ありて寂して年八十九仙元院永仁元年七月
 勅證して記主禪師と号せり

此師兼朝庵梨子
 依て真言を學ぶ又兼西禪師此師兼朝庵梨子
 諷して禪を修む又後為禪師と受戒して清と名ふ
 晩は初紫善導寺の開祖西堂光上人の室に入て淨土宗
 と修むこれ初蓮社の方之祖多弘安十年七月有
 鐘舎ありて寂して年八十九仙元院永仁元年七月
 勅證して記主禪師と号せり



初編 下巻 五十四
初編 下巻 五十五
初編 下巻 五十六
初編 下巻 五十七
初編 下巻 五十八
初編 下巻 五十九
初編 下巻 六十
初編 下巻 六十一
初編 下巻 六十二
初編 下巻 六十三
初編 下巻 六十四
初編 下巻 六十五
初編 下巻 六十六
初編 下巻 六十七
初編 下巻 六十八
初編 下巻 六十九
初編 下巻 七十
初編 下巻 七十一
初編 下巻 七十二
初編 下巻 七十三
初編 下巻 七十四
初編 下巻 七十五
初編 下巻 七十六
初編 下巻 七十七
初編 下巻 七十八
初編 下巻 七十九
初編 下巻 八十
初編 下巻 八十一
初編 下巻 八十二
初編 下巻 八十三
初編 下巻 八十四
初編 下巻 八十五
初編 下巻 八十六
初編 下巻 八十七
初編 下巻 八十八
初編 下巻 八十九
初編 下巻 九十
初編 下巻 九十一
初編 下巻 九十二
初編 下巻 九十三
初編 下巻 九十四
初編 下巻 九十五
初編 下巻 九十六
初編 下巻 九十七
初編 下巻 九十八
初編 下巻 九十九
初編 下巻 一百

廿

